

NO



なんたる星

October 2017

Ishado Hitoshi
Ukai
Kagata Yuko

Scope
Niceguy
Hadashi

Shintokumei
Yoneda Kazuo
and Koiwoshiteiru

【目次】

連作

いいね0短歌・・・ナイス害

時計うばい・・・迂回

気がむいたらいく植物園・・・加賀田優子

恋する媒体・・・スコラブ

午後・・・はだし

企画

うううううおばけ特集うううううう

なんたる星の題詠100

編集後記

白シャツが映えてほしくて洗濯の蛇口を少しゆっくりひねる

とくとくと真水をそそぐ真上にはつけっぱなしの真っ白い明かり

代走が出されましたと繰り返すラジオを砂場に置いて帰った

忘れものですよといって渡された靴の手入れの小さい冊子

長ねぎがはみ出している豚肉のヒレのパックもはみ出している

ろっこつを落としたような秒針の音をしている時計をうばう

あ、お、ぞ、ら、と指先で確認をする指紋がペンキで薄まっている

公園の時計の謙虚うらかなりにりんごを受けとめるようにうばう

くつべらのしっぽのところ、みたいな言い方を思っついでには言わないでいる

浴室に時計をしまうちよっとだけくずれるけれどしかたないので

うなじからするりするりとほどかれる小雨の窓にたまるあかりで
くすぐったいところにできる外国の宝石ぐらいあおいろの痣

鍵盤は舐めても音になるけれどほんとだ指もきもちいいんだ

水だけでおおきくなれていたところがなつかしいかときかれている

あふれてからそうと気づいた浴槽に沈めてもぶかんとする身体

雪が降ればさよならばかりいいたがる噴水もしずかになるだろう

おねがいをするとそのぶん丁寧にいれてもらえる名前のながいお茶

よぶ声に返事をしないときめたときわたしのひかりまじりの呼吸

雨がきてコンクリートのまだ濡れていないところに指をかさねた

滑らかにひらく門にひたいをつけて気がむいたらいく植物園

嘘でしょうわたしが恋をしていると知ったその日の暴風警報

察するに待たせていたね受け取ったバゲットサンドのわずかな湿気

食べるともなく囁んでいるひと切れを呑み込むまでのモンスターである

つまらないイエイエイテレビいいテレビきみも時間を食べる異形か

死んだとは言われず去ったポケモンは葬式だってないのだろうね

CDを傷つけたからCDが廃れるまではもう返さない

可能性など考えてただ終わる閉じた扉のコンマ数ミリ

音だけの存在になるしばらくは良い曲だけを流しておいて

枕元レディオレイディオ思うのは交通情報などなくなる日

コーポだかハイツだとかに住んでたね紛らわしいね電話していい？

デイス、スタア 星の見えない街でいい大災害が来ませんように

午後

はだし

まだ水も飲んでないのにお昼だな テレビは海でゴミ拾ってる

ニユースみた後でバイトへ行かなくちゃいけないんですけどね、こっちは
じゃないけど似てるビニール傘があつまってて、なんか 急がなくっちゃ

ザーサイの瓶に雨水ためましてパッケージとの齟齬をたのしむ

ポテトチップスの袋がどばーんとなって、開けかた百選に載る

リモコンに鹿のシールを 奈良県にわたしができることといったら

ベランダへ出ればその日の外のおい 猛烈にふがしが食べたいな

情緒がもうわからなくなって財布から500円出して握っていると

玄関の所作のすべてが雑になってく、頼んだものがとどいて

うれしくて靴下を脱いじゃったのが今日のハイライト おやすみなさい

う う う う う う

おばけ特集

う う う う う う



あなたは心霊写真を信じますか？

あなたは、自分が「心霊写真」になったことがありますか？

もう何年前になるでしょう。俺が成人式を語るとき、あの不気味な顔と光を思い出すと未だに背中がゾッとします。

山形市の成人式の日はず雪が降ります。たいして久しぶりでもない再会に黄色い声をあげて喜ぶ若者たちにとってその雪は、紅潮した顔の温度を下げてくれる気持ちの良いアイテムでしかありません。晴れ着の裾を気にする暇もなく、きゃあきゃあ言い合うのです。

かくゆう俺も、気合の入った髪型の友人たちと写真を撮ったり、地元のテレビキャスターと写真を撮ったりして、ピースサインを「2」と数えるなら「60」くらい数をこなし、気分良くたくさんのファインダーに笑顔を振りまきました。

式典が終わる頃、職場の同僚と偶然出くわしたので仕事の愚痴で盛り上がっていると、2人組の女の子が居心地悪そうにしていたので声を掛けました。帰りの車がなく困っているというので、同僚のレガシーに4人乗り込み、暗くなる前に会場を後にしたのです。

山形市は時間を潰せる場所がないので、「記念に」とダサイプリクラを撮ってからは、市内を右往左往しながらただただ世間話をするという「ドライブしているからこの時間は無意味ではない」をしていました。

「天童高原スキー場に行きたい」と、和歌山の大学に行ってるという女の子が言うと、もう一人の女の子が「そこ子供の頃に行ったことがある」と言うので、女の子に好かれたい同僚は二つ返事でアクセルを踏み込みました。雪が半端に残った山道を四駆のレガシーはぐんぐん登り、しばらく走るとヘッドライトに照らされたスキー場の看板が出迎えてくれました。

「えー？やってないの？」

「シーズンなのにね。っていうかやってたらスキーしてたの？」

「しないけど、ただ見たかったの」

雪は止んでいたのだから4人は車から降り、この季節では異常なくらい少ない雪を気かけながらロッジの中の様子を見に行きました。

当然誰も居ません。営業をしなくなってから何年経っているのでしょうか。ガラスに映る自分達ばかりハッキリ見えます。中の様子は窺え知れなかったので諦めて振り返ると、付けっ放しのヘッドライトに照らされたリフトがとても不気味で、時おり強く吹く風にリフトは生きているようにギィギィと応えるのです。

「記念に」と、女の子は写ルンですのフラッシュを押しました。キィィンと小さく叫ぶ方向にピースサインをして、「うお！まぶしい！」とみんな笑いながらも、写真を撮った女の子の顔をしばらく見ることは出来ませんでした。その時、怖かったんです。カメラのフラッシュにスキー場は一瞬明るくなり、「ここに居てはいけない」という、冷静な感覚が心臓を叩いたのです。肝試しで来たわけではない。

たまたま来たら廃スキー場だった。ダメだ！ここに居てはいけない！

「早く下山しよう！」と言うと、慌てた同僚のレガシーはスタックしてしまい、ギアをガチャつかせながら怒号が飛び交います。仕方なく俺と女の子2人とで、重たいレガシーのケツを何度も何度も押して、やっと脱出できた頃には吹雪になっていました。

疲労感と、びしょ濡れになった気持ち悪さも相まって、帰りの車中ではみな無言で、連絡先を交換した後それぞれ青ざめた顔で家路につきました。

それから1週間後、和歌山から郵便が届きました。あの女の子からです。俺の名前の漢字が間違っていたので、からかおうと封を開ける前に電話をしました。

「郵便届いたよ」

「写真見た？」

「写真？まだ封も開けてない」

「早く見てよ！！」

封を開けると写真とプリクラが入っていました。プリクラの切り方が雑で、和歌山の大学じゃない方の女の子は、少し影がありつつも本当に可愛くて、思い出して嬉しくなりました。

「見た？」

写真をマジマジと見るまでもなく、俺と、その隣りで笑っている和歌山の女の子の頭の上から、太くて白い光がビョーーーーーと伸びています。

「なにこれ、心霊写真？」

「やばくない？」

白い光は完全に頭に繋がっていて、後ろの真っ暗なロッジの方に長く長く伸びていました。そして、和歌山の女の子の隣りにいる同僚と、俺の隣りにいる可愛い女の子は何事もなくピースをして笑っています。

「え？4人写ってるじゃん...」

「でしょ！？これ誰撮ったのよ！」

「なんだこれ！？誰だよ！知らねえよ！」

もう怖くて、写真を触れなくて、写真を落としました。それでも写真は裏返しにはなってくれず4人は笑っています。

「ちょっと待った、うちの肩の間のこれなに...」

和歌山の女の子と俺の肩の間に、顔がありました。襟元が明らかに軍服で、リュックのような物を背負ってこちらを見据えている、それは日本兵でした。

「きゃあ！なにこれ！知らなかった知らなかった知らなかった知らなかった知らなかった！」

「これ焼き増ししたの？」

「私のところにあるのと、それと、2枚！どうしよう！」

「そっか。なんか変なこと起きた？頭痛いとか、ケガしたとか」

しばらく黙った後、彼女は震えた声で「大丈夫、何も起きてない」と答えました。

俺自身にも別に異常はなかったので、心配ない心配ないと、電話口で泣いている彼女に声を掛け続けました。

お寺とかに持って行ってお祓いした方がいいという事に落ち着き、その後すぐ近くのお寺に持って行き、写真を燃やしてもらい、お祓いをしてもらい、心霊写真になってしまった自分の将来を案じました。

後で知ったことなんですが、そこは有名な心霊スポットらしく、脱走兵が自決した場所だったとか。これ創作じゃなく本当の話なので、俺は未だに心霊写真を信じてます。

おわり

tag スコアブ

(ここに心霊写真)

いいね！4242件

#ghostpic#影が薄い
#盛れてる
#盛れてるけど影薄い
#墓地#お気に入りの場所
#恨めしや#イケボ
#幽霊さんと繋がりたい
#繋ぐ手は透けてる
#ご飯行きたい#食べないけど
#饅頭#饅頭しかない
#法事パーリー#法事パーリナイ

#ホーリーピーポー#ホリピ

かぼちゃの種を、スプーンで掻き出していく。

ぶちぶちぶち、と繊維が切れて、短く持ったスプーンからはみ出した種が指を這う。

ねっとりした綿状のかたまりを三角コーナーに落とすと、爪の隙間が黄色くなった。

かぼちゃのおばけ職人。という職業を思いつく。

かぼちゃのおばけ職人はほとんど丸ごとのかぼちゃの頭に穴を開けて、ごりごりぶちぶちと中身をくり抜いていく。とん、とん、とんと空っぽにしたかぼちゃを重ねて、重ね終わると今度は目と口を三角形に彫り抜いていく。すごく手早く。

「中身を出す前に目と口を彫っちゃあいけんよ。目と口ができると、わたしらの顔を覚えられてしまうけな」と、孫に教えたりする。覚えられたらどうなるんだろう。とずっと考えたまま中学生くらいになって、おばあちゃんは死んでしまって、残ったかぼちゃに見られたときに「目指そう」とか思うのだ。うん。

いま私が作ってるのは普通の煮物なので、私はかぼちゃのおばけ職人ではない。

かったいかぼちゃを力づくでどずんと叩き割り、この大きさにかじり付きたいかなくらいのサイズにしていくだけだ。

手が痛くなってきたころ、ふと視線を感じる。

テーブルの上に、プラスチックのかぼちゃのおばけが置いてあった。

いつか買ったんだっただか、何かのおまけか、貰ったのか、覚えていないけれどこっちを見ていた。

なに考えてるんだろう。

顔っぽいものを見ただけでそんなふうを考えるくらいには、ひとり感に浸っていたらしい。

なに考えてるんだろう。

私の料理を面白がっている？切られるかぼちゃに同情している？わたしを、覚えようとしている？

にやにやしてわかんない。

手にとると、後頭部のところにスイッチがあって、押すと電球が中で光って、つやつやのオレンジの樹脂が薄く透けた。

なんにもわからないんだ、ということがわかった。かぼちゃは光ったままテーブルの上で笑っていた。

爪に挟まったかぼちゃが乾いてきていて、煮物はぜんぜんできてないけど、いったんやめて外に出た。

お祭りの音が聞こえた。

ハロウィンのなやつかな。仮装した人たちが練り歩くタイプの。人が練り歩くのなら、屋台とかも出ているかもしれない。めっちゃはげた本物のコウモリ男が超音波で屋台の金魚を気絶させてめっちゃ怒られてたりしないかな。と思ってから、家の中に戻った。

成仏するつもりでちーちゃんの身体を借りてハルカとキスさせてもらったのが日曜日。だけど成仏はできなかったし、ちーちゃんともすっかりこじれてしまった。

借りた身体はやっぱり借りた身体だったのだ。わたしもよっしゃ触れた！感があったけど、結局直接キスしたのはちーちゃんとハルカ。そこからふたりはいい感じに意識しあってしまって、ついに昨夜、いい感じがとてもいい感じですごくいい感じになってしまったらしい。

そういう告白をぼろぼろ泣きながらされてしまった以上、ちーちゃんのところにはもういられない。ごめんねごめんね、ってあんなに謝らせてしまって生きてても死んでてもぜんぜんだめな存在すぎて心の底から成仏したい。

でもできない。

「あなたの葬式のときに、一生ぶん、アホ、と思ったと思ってたけど」

カズちゃんはわりとわたしが見えてるほうみたいで、ちゃんと目をあわせて話してくれる。

「まだぜんぜんアホ、って思えるわ」

うん……とわたしはうつむく。

一応、と出してくれたお茶の湯気が額をつきぬけていくのがわかる。

そこからカズちゃんは何回かアホアホ言ったあと、あんだぶれてるから酔ってきた、きもちわるい、と床にごろんとなった。

「わたし、成仏したい」

「っても、具体的にどうすんのそれ。もっとイチャついたらできそうとかいうかんじなの」

「いや、なんかもうそっち方面はやめとこーと思って」

「まあ、そうだね」

カズちゃんがまぶたを閉じた上からむに、むに、と指で押して目をほぐしている。

その皮膚がごく普通にやわらかく動くところが、妙によくみえる。

「除霊、みたいな方面に行くのはだめなわけ。塩に頭からつつこむとかさ」

「ええー」

「悪霊退散」

「あんなに痛い思いして死んだのにー、またなんか痛いっぽいのやだなあ」

「ああ……」

「なんとかやすらかに終わりたいんだよね。ハルカとキスしたら絶対悔いなく消えられる！と思ったからしたんだし、なんか途中まではその方向性であってた気がしたもん」

途中まではね。

「じゃあー、他の」

「うん」

「悔いなく消えられそうなやつ」

カズちゃんはむくりと身を起こし、またわたしを見てくれる。

「オムライス」

「オムライス？」

「オムライス食べたい」

性欲からの食欲かよ、とカズちゃんにやたらとうけてちょっとうれしい。

じゃあいつちょやったりしますか、とカズちゃんは原付をととととばしてもろもろを買ってきてくれた

。

「わー、マッシュルームだ」

「あたしも食べるからね」

手伝えないのでカズちゃんのまわりをうろちょろしながら、刻み、炒め、混ぜ、焼き、なんかをみる。

カズちゃんの肘とか肩とかがわたしをすいすい通り抜けていく。

「なんかさ」

「うん」

「めっちゃ横にいるのにぜんぜん邪魔に感じなくて面白いわ」

とか言っているのに真顔だ。

オムライスがあっさりできる。わたしは音のない拍手をする。

カズちゃんはケチャップを構え、

「『成仏』てかこうか……いや、画数多くてめんどいな」

「ふつうにかわいくしてよー」

「『じょうぶつ♡』」

「やーだー——」

結局『アホ♡』と書かれてしまうけど、みればみるほどオムライスがめっちゃめっちゃおいしいそうでどうでもよくなる。

たまごのちょっととろとろなところ、ざくっとスプーンをいれたらいろんな具がブワッとでてくるぞーという高揚感。

「やばい、最高のオムライスだよカズちゃん」

自分のやつに『カズ』と書いたカズちゃんがふりかえる。

「はい、じゃ」

銀色のスプーンを一本。カズちゃんはなんの迷いもなく、『アホ♡』の中央に突きたてた。

「え——————っ!？」

「えっ、えっ、なに!？」

「な、スプーン、えっ?」

「え?お供え的な」

あ、そういう感覚!?

びっくりしてしまっただけ、たしかに、ちゃんとスプーンに触れるようになっている!

「すごい……」

「いや、びびった」

「それわたしのセリフだから」

「ははは」

めしあがれ。

いただきます。

ふ、と、ちーちゃんの身体で、ハルカとキスしたときのことを思いだす。

急にいろんなところがあったかくなって、それがちーちゃんのなのか、ハルカのなのか、わたしのなのかわかったのか、わかんなかったな。

せっかくだし撮っとくか、とカズちゃんがカメラを起動させるなか、わたしはスプーンをすぼりと引き抜く。

銀色のカーブに、オレンジ色のお米、玉ねぎのかけら、たまご、ケチャップがはりついて、湯気。

カズちゃんがカメラを片手にけたけた笑っている。

「あんたほぼ写ってないわ、やばい」

わたしはできるだけたくさん、掬えるだけ掬って、ずっしりとしたスプーンをもちあげた。

ぜんぶぜんぶ、バイバイ。できる、はず。

スプーンの縁がくちびるにあたる。それがあまりにあたりまえのことだということに気づくのに、すこしかかる。

泣きそう、だけど、泣かない、ぞ、と、わたしは、ゆっくりゆっくりオムライスを食べはじめたのだった。



なんたる星 から 100のお題

説明

短歌だったりそうじゃなかったりするものへのお題が100あるよ

なんだかやたらと答えてみたいとき、短歌でも絵でも小説でも音楽でもダンスでも洋服でも料理でも、なんだかやたらにつくってみたいときに、つかってみてね

ぜんぶ答えなくちゃだめとかいうことはないよ。すきなところからすきなだけだよ

つけたとき、どこかに「なんたる星」からのだよってかいてくれるとうれしいよ

Twitterでは #なんたる星100のやつ をつけてね

なんたる星がとんでみにいくよ

Tweet するときは、何番のお題をつかったのかわかるようにしてね

企画その1

お題に答えて文学フリマ東京でなんたる星記念品をもらおう！

10月号付録の解答用紙に「解答」をかいて、2017年11月23日「第二十五回文学フリマ東京」のスコラブ&ナイス害ブース（~~ブース名はなんたる星 Twitter アカウント等で発表~~）にもってきてくれた方に、記念品をプレゼント！**1F Eホール G05~06!!!**

- ★ 解答数によってもらえるものがかわるよ
- ★ 解答用紙以外の媒体でもってきてもらってもだいじょうぶだよ
他の紙・布・食べ物・データなどでもってきてもらってもOKだよ
データなどの場合は、なんたる星 Twitter アカウント (@nantaruhoshi) のDMに送ってくてもいいよ
解答用紙以外の媒体のときは、何番のお題をつかったのかわかるようにしてね
- ★ もってきてくれた「解答」はなんたる星12月号に掲載させてほしいよ
掲載はNG~☆という方は、解答用紙などにその旨をかいいたり、スコラブ&ナイス害に直接伝えてね

企画その2

お題に答えたらなんたる星にみせてほしい！

と、いう気持ちにあふれているので、文学フリマにはこられないよという方も、なんたる星 Twitter アカウント (@nantaruhoshi) のDMに「解答」を送ってみてね

記念品はプレゼントできないけれど、なんたる星の人々がめっちゃくちゃよろこんでよんだりみたりきいたりしたりするよ

- ★ 2017年11月23日までに送ってきてくれた「解答」は、なんたる星12月号に掲載させてほしいよ
やっぱり掲載はNG~☆という方は、DMにその旨をかいて送ってね
- ★ 12月号ではなんたる星の人々が、文学フリマでもってきてくれた&なんたる星アカウントに送ってくれた「解答」の中から、きゃー！とかおお……！となったものを選んで、感想をかかせてもらいたいなとおもっているよ
- ★ Twitter で #なんたる星100のやつ をつけてくれたものも、なんたる星の人々がみにいって、12月号でとりあげさせてもらうかもしれないよ

お問い合わせは、なんたる星 Twitter アカウント (@nantaruhoshi)、もしくは、なんたる星10月号コメント欄へおくってね

よろしくね！





おなまえ： _____
(あしは) ツイッター： _____
(あしは) メールなど： _____

1. もしAI（人工知能）が詠んだら

2. 散文っぽい短歌ってあると思うんですけど、それが読みたいです

3. 動揺

4. 夜9時といえば

5. 穴埋め短歌

○○○○○憎しみながら○○○○○2秒ジャストの○○○○○○○○

6. いまのところいちばんおいしいと思うもの

7. あなたはきりんさんなのか...？

8. 穴埋め短歌

味噌ベース醤油ベースの○○○○○ありとあらゆる恋を孕んで

9. 風邪が一発で治る短歌

10. こっそり教えてもらいたいこと

11. 絶対大丈夫ないいわけ

12. 短歌廃人が言いそうなこと

13. (「魚」じゃなくて)「おさかな」で題詠してください

14. おいらルパ～ン○○○世～

15. 大喜利 東京に住み始めた河童の悩み

16. へいへーい

17. なるべく古い思い出

18. お題「首都」で何か書いてください

19. 題詠 文化センター

20. うらやましいなー

21. 青いコンビニエンスストアについて

22. 江戸かよ

23. 王様ゲーム

24. 返してほしいもの

34. 穴埋め短歌

○○○○○パーカーの紐○○○○○自然っすよね○○○○○○○

35. 審査委員長、判定をどうぞ

36. 眠かったら一旦寝てもいいっすよ

37. 穴埋め短歌

○○○○○謝ってくれ○○○○○君の後ろの○○○○○○○

38. エンドロールで帰る理由

39. ヒャン歌

40. 穴埋め短歌

石と石○○○○○○○ケーキより○○○○○○○声が逃げ出す

41. この歌はこの色で書いてほしいという歌と、その色

42. ばよえ〜ん

43. 題詠 水餃子博物館

44. 家からいちばんちかいコンビニに行って帰ってくるあいだにできたもの

45. 1999年の夏

46. こてんぱん

47. 500円でいける町

48. どこかひとつかならず間違えてください

49. 居合抜き

50. 内容がティッシュ一枚くらいの軽さの短歌

51. シチュエーション詠 部屋で二人で座ってまったりしてる

52. 穴埋め短歌

火星プリン○○○○○○○○二人きり○○○○○○○○○○○でした

53. 春の小説

54. 穴埋め短歌

山形の○○○○○○○○○○○○○俺より俺の○○○○○○○○○

55. 筍ごはん

56. 午後四時頃の歌

57. お財布を落とした次の日

58. 題詠 助詞（間違った使い方）

59. お酒の思い出

60. みじかい日記

61. 床と柿

62. 偶然短歌をひとつ（見つけた媒体も書いてください）

63. 外国人の名前

64. 好きなオノマトペがふたつ以上はいつているもの

65. 穴埋め短歌

ラブアンド○○○○○○○○○○○○○○うるさい空のうるさい○○○

66. なんにでも課金できるとしたら何にしたいですか？

75. あなたが落としたのは○○の○○？それとも○○の○○？

76. 五秒前

77. こんなに肉が焼けているのに（下の句）

78. 「さんざめく」の使い方を間違った短歌

79. 「トマト」が三回でてくる

80. デビュー曲のタイトル

81. 題詠 かまいたちの夜

82. しまったかぶり

83. ! ! ! 以上 ! ! ! ! ! ! ! 以下

84. 観察力ヤバいなど思わせる短歌

85. 穴埋め短歌

夢で死ぬつもりでいます○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○セクシーな酒

86. 題詠 弾丸ツアー

87. 屋根裏

88. 曜日感覚

89. ガッツが感じられる短歌

90. 穴埋め短歌

母親の○○○○○○○○ニューヨーク○○○○○○○○信じられずに

91. 穴埋め短歌

デモニッシュ○○○○○○○○走り出す○○○○○○○○存在するな

92. 造語

93. 観ていない映画について

94. 角のあるもの

95. 地元のお祭り

96. みどりいろっぽいもの

97. スキヤキソング

98. 方言

99. 身体が一日中半透明

100. やり終えた感想を一言（短歌で）

【編集後記】

おぼけとかぼちゃの季節ですが、東京文フリが控えている、ということで少し意識してみんなでてんやわんやしてみよう。ということになりてんやわんやしました。ぜひ回答して、スコラブとナイス害のブースまで持って行ってみてください。行けないよ！という方々は、行けないメンバーと一緒にしくしくしながらツイッターに流したりしましょう。笹流し。星と笹はとても近い。

さて日記になりますがストーブを出しました。フル装備は電気ヒーターとこたつですが、真打ちこたつは未登場です。寒いときは縮こまって速度◎・範囲×のヒーターに炙られるわけですが、あの炙られて肌がじんとなってる感じがちょっと好きでよくそのまま寝るという話です。童話のオチで鬼とかになりそう。

あとは柿がおいしいです。ほんとうにおいしい。鬼になってから食べたら人に戻れそう。人になりたい。

それでは秋と冬、過ごしていきましょう。

2017/10/25 迂回

アイロン一世は木製

アイロン二世は重さ自慢

アイロン三世ささやき上手

すごくとてもかろやかに、これはYシャツがまっすぐになる音——

執筆者

スコラブ ([@scope_scape](https://twitter.com/scope_scape))

はだし ([@sunsetsan0](https://twitter.com/sunsetsan0))

ナイス害 ([@NiceGuuuy](https://twitter.com/NiceGuuuy))

加賀田優子 ([@0ccak](https://twitter.com/0ccak))

迂回 ([@ukaian](https://twitter.com/ukaian))

なんたる星10月号

発行日：2017年10月25日

編集発行人：迂回

表紙：スコラブ

企画：加賀田優子

Twitter：[@nantaruhoshi](https://twitter.com/nantaruhoshi)